

平成 22 年 5 月 24 日現在

研究種目：基盤研究（A）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18200045
 研究課題名（和文） 中国内モンゴル自治区におけるモンゴル民族の生活様態と
 居住空間に関する総合的研究
 研究課題名（英文） Comprehensive research on Mongolian life style and residence space
 in Inner Mongolia, China
 研究代表者
 今井 範子（IMAI NORIKO）
 奈良女子大学・生活環境学部・教授
 研究者番号：30031719

研究成果の概要（和文）：

気候や生業等の異なる典型的な 4 地域において、近代化、都市化、定着化等により急激に変容するモンゴル民族の生活様態を、衣・食・住生活、伝統行事、家族等の視点から全体的に把握するとともに、地域的相違を明らかにした。生活様態と関係する居住空間について、ゲルの用途変化と固定家屋の使い分け、集落の形成過程、放牧地分配方法とゲルの出現率との関係を把握した。また教育改革等に伴い、親元を離れて暮らす子どもの直面する諸問題と家族の居住の諸課題を指摘した。

研究成果の概要（英文）：

Living conditions of Mongolian people, which are drastically changing due to modernization, urbanization, settling and so on, were totally determined from a perspective of food, clothing and housing and others in four typical areas of diverse climates and vocations. In the meantime, regional differences were clarified. The relationships were shown between utilization change of Ger and the formation process of settlements, the distribution method of pasture area and the appearance ratio of Ger as for living spaces related to living conditions. Issues were also found on family residence and children living away from home in connection to education reform and so on.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	5,500,000	1,650,000	7,150,000
2007 年度	5,800,000	1,740,000	7,540,000
2008 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2009 年度	5,800,000	1,740,000	7,540,000
総計	20,500,000	6,150,000	26,650,000

研究分野：住居学

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：モンゴル族、内モンゴル、居住空間、生活様態

1. 研究開始当初の背景

中国・内モンゴル自治区はモンゴル国と同様にモンゴル族が遊牧生活を営み、独自の生活様式を確立してきた地域である。しかし、17 世紀初頭に清朝の直轄地になった後、1947

年の内モンゴル自治区成立を経て、中華人民共和国の一行政区としての道を歩んでいる。

このような経緯により、中国の影響を大いに受けており、最近ではとくに次の 3 つの要因によってモンゴル族の生活様式が急速に

変化しつつある。

(1) 中国全土で生じている都市化・工業化

都市部に住むモンゴル族の大半は、第二次産業・第三次産業に従事し、牧畜を基本とする伝統的な生活様式の継承は困難となっている。

(2) 中国政府による経済政策の転換を機とした、家畜の私有化と牧畜民の定着化

1978年の改革開放政策後、1982年の人民公社解体を経て1990年代まで段階的に放牧地の使用権と管理権が各世帯へ分配された。これにより、牧畜民の土地の囲い込みと定着化が進行した。

(3) 漢族の影響

都市部や農村部では漢族の比率が高く、とくに言語や子どもの教育現場において中国語（漢語）の浸透が進み、民族学校の統廃合なども生じている。

以上を背景として、モンゴル族の生活・社会・文化は急速に変貌し、消滅するものも少なくないと予想される。時代の変化にあわせた生活様式の変化及び発展と、少数民族としてのアイデンティティをどのように調和させるかが重要となる。

2. 研究の目的

(1) 先に述べた状況の中で、モンゴル族の生活が全体としてどのように変化しているかを把握する。そのため、気候や生業等が異なる典型的な4地域を選び、衣生活、食生活、住生活、伝統行事、家族等の視点から生活様態を総合的に調査し、モンゴル族の伝統的な生活様式がどのように変化しているか、また地域によってどのような違いがあるかを明らかにする。

(2) 居住空間の変容と、家庭と子どもの生活環境の変容については、その過程をより詳細にとらえる。前者ではモンゴル族の伝統的な住居（ゲル）がどのように変化しているか、後者では近代化、都市化によってどのような変化が子どもたちの生活環境に生じているかを把握する。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、2種類の研究体制をとった。

(1) 内モンゴル自治区全体の動向を把握するため、現地研究協力者と協議のうえ、気候や、主とする生業の異なる地域を選定し、年度ごとに研究分担者、連携研究者が多数参加する合同全体調査を実施した。

調査地と調査時期は表1の通りである。1.と4.は草原地域、2. 沙漠地域、3. 半農半牧地域で、4.についてはブリアート系モンゴル族や中国だけでなく、ロシア等の影響も受けた生活変容について考察している。

それぞれ、衣・食・住、伝統行事、家族と

いった視点から牧畜民へのヒアリングと、住居の配置、平面図の実測、写真及び映像での記録を実施している。

表1 全体調査概要

調査地・調査期間・参加者数	
1	シリンゴル盟錫林浩特市 2006年9月15～19日（参加者13名）
2	アラシャン盟阿拉善左旗・右旗 2007年8月19～25日（参加者12名）
3	赤峰市巴林右旗 2008年9月12～16日（参加者17名）
4	ホロンバイル市新巴尔虎左旗・鄂温克族自治旗 2009年8月5～12日（参加者16名）

(2) 各専門分野での詳細な状況を把握するため、地域と調査対象を絞った個別調査を実施した。ここでは、主に以下の2つのテーマについて重点的に調査し、変容過程とその要因に関する成果を得ることができた。

- ① 子どもの生活環境や遊び場に関する調査
- ② モンゴル族牧畜民の定着化に伴う居住空間の変容に関する調査

4. 研究成果

(1) 全体調査による研究成果

2006年度に実施した調査については、主な発表論文の〔雑誌論文〕⑩～⑫、2007年度は②～④にて報告している。2006～2009年にわたる4度の調査のヒアリング、実測、画像、映像データは資料としてまとめた。

各地で政策の実施年度やその内容が異なり、牧畜民の定着化の進度や要因には多くのタイプが存在することが明らかとなった。

調査1.のシリン浩特市では、1990年代に入ってから、都市化と工業化の影響を強く受けている。資源開発や草原悪化を理由とした牧畜業の禁止に伴い移民村へ移住した事例、牧畜業だけでなく植林や観光等の新たな事業を展開している事例、子どもの就学に伴い都市への移住と牧畜業の存続に揺れる事例等を把握した。

調査2.のアラシャン盟では沙漠化に伴う農業転換が1970年代から実施され、また2000年代に環境政策の一環として、牧畜業の禁止と牧畜民の移住、第二次・第三次産業への移行が進められていた。大規模な開発や環境上の問題により、政策の影響を最も顕著に受けている地域である。移住や生業の変化は、衣食住は勿論、伝統的な牧畜民同士のつながりや家族関係の分散、また教育観等にも大きく影響していることが明らかになった。

調査3.の赤峰市では、1947年の自治区成立に伴う土地改革、1958年より始まった人民公社化運動などを契機として、牧畜民の定着化と農業の導入等がみられ、1978年の改革開放政策以降は、牧畜業を続けている事例でも、家畜の種類が、伝統的な羊から現金収入を得やすいヤギや乳牛等にシフトしている。1940年代から日干し煉瓦造の円形ゲル、1950年代

からは日干し煉瓦造の固定家屋、1990年代に入り煉瓦造の固定家屋を建築するなど、定着化の過程が段階的にみられる事例が多い。

調査4.では、ブリヤート系モンゴル族独自の伝統文化に触れ、とくに衣服や食生活に大きな特徴をみることができた。普段着として民族衣装を着用する例もあり、儀礼服化している他地域と比較すると伝統文化が継承されているといえる。また、夏季には植物を利用するゲルや、一般的なフェルトを利用したゲルも使用頻度が高い。これは、面積の広い放牧地で牧畜業が維持されてきたことが要因として考えられる。しかし、一方で1990年代以降、トタン屋根等新たな建築材を用いた固定家屋の導入が一気に加速する等、他地域よりも生活変容の過程が短期間で進む可能性がある。

(2) 個別調査による研究成果

① 子どもの生活環境や遊び場に関する調査

ここでの成果は、[雑誌論文]⑥⑦等で報告している。主に牧畜区と都市部での調査を通して、子どもの生活環境を把握した。

牧畜区では、行政区画改革に伴い、学校の統廃合が進んでいる。都市部にのみ学校が集中した結果、数100km以上に及ぶ広大な範囲が一つの校区となり、牧畜区で就学年齢に達した子どもは親元から離れて都市生活を送る必要がある。親世代は主要な労働力として牧畜区に留まるため、多くの子どもは寄宿舎での生活、あるいは祖父母世代や親戚が子どもの面倒をみるという状況になっている。

これを、中国の農村地域で生じている親の出稼ぎに伴う「留守子ども」とは逆の現象として「逆留守子ども」と位置付け、その問題点や課題を明らかにした。

「留守子ども」と同様の問題としては、低年齢から親と離れて暮らすことで、情緒面、発達上の不安を抱える子どもの増加が懸念されること、親戚や祖父母など親ではない保護者にとって、十分なしつけや学習上の教育を行うことに不安を抱える場合があること等が挙げられる。

「逆留守子ども」独自の問題としては、子どもが低年齢から都市部で生活することによって、日常生活によるモンゴル族の伝統的文化の継承が困難になることである。とくに伝統的な祭事や行事への参加や家畜との触れ合い、牧畜業に関わる文化や遊びの消滅などが危惧される。また、都市部での居住環境は間借り、倉庫などの狭小スペースの改造など、牧畜区での広大な自然環境とは全く異なる環境での生活となる。遊び場についても十分なスペースが確保できない等の問題がある。

これらの問題を解決するためには、日常的に家族がともに生活し、家庭生活のなかでの

教育や伝統的な文化を継承する環境をいかに実現できるか、また学校教育のなかで民族文化の伝承を子どもだけでなく親世代に対してもいかに意識付けるかなど、教育システムや教育内容にも踏み込んだ対策が必要である。

② モンゴル族牧畜民の定着化に伴う居住空間の変容に関する調査

ここでの成果は、[雑誌論文]①⑨等で報告している。主に伝統的な移動住居であるゲルの用途変化と、集落形成をしている牧畜民の定着化過程について把握した。

1982年以降の放牧地使用权の分配に伴い、移動住居であるゲルは急速に消滅へ向かっている。現在使用されている地域でも、家族の一部、あるいは牧夫等が臨時的に使用する形態が最も多い。2000年代以降は、環境政策による移民村において仮設住宅の代わりとしての利用や、観光用、祭事用など機能を特化した利用もみられる。しかし、今後もゲルが存続する条件としては、移動を伴う牧畜業がいかに維持されるかが最大の焦点となる。各地域の状況に合わせた放牧地の分配方法をより詳細に検討することで、放牧地の保護と、持続的な牧畜業が維持され、それがゲルを含むモンゴル族の伝統的文化の継承にも繋がると考える。

また、政策的な土地分配や牧畜システムの変化に対して、集落形成をすることで対応している地域では、ゲルは100%消滅している。しかし、伝統的な宿营地集団を基礎とした牧畜民同士のコミュニティは強固であり、家屋内での祭事や伝統的な空間構成も引き継がれている例がある。今後、都市化の影響を受ける可能性が高いが、集住型の牧畜業とモンゴル族の伝統文化がいかに共存するかを検討することは、自治区内の大半で移動放牧が難しくなっている現状のなかで、現代生活に即した提案に繋がる可能性がある。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計12件)

①野村理恵・中山徹・今井範子・姫茹・咏梅：牧畜民の定着化過程における「ホト」の形成と居住形態の変化—中国内モンゴル自治区シリング盟镶黄旗の「ホト」を事例として—、日本建築学会計画系論文集、第75巻 第651号、pp.1141-1149、2010 (査読有)

②野村理恵・今井範子・中山徹・上野勝代・長坂大・武藤康弘・室崎生子・姫茹・咏梅・敖敦格日勒・芦田奈緒：アラシャン盟アラシャン左旗における牧畜民の生活様態及び農業転換による生活変化—中国内モンゴル自治区沙漠地域におけるモンゴル族の生活様態とその変化(第1報)—、奈良女子大学家政学研究、Vol.56 No.2、pp.39-48、2010

(査読有)

③咏梅・今井範子・中山徹・上野勝代・長坂大・野村理恵・武藤康弘・室崎生子・姫茹・敖敦格日勒・芦田奈緒：アラシヤン盟アラシヤン右旗における環境政策と生活様態の変化—中国内モンゴル自治区沙漠地域におけるモンゴル族の生活様態とその変化(第2報)—, 奈良女子大学家政学研究, Vol. 56 No. 2, pp. 49-57, 2010 (査読有)

④野村理恵・今井範子・中山徹・上野勝代・長坂大・武藤康弘・室崎生子・姫茹・咏梅・敖敦格日勒・芦田奈緒：アラシヤン盟における環境政策による居住地移動と生活様態の変化—中国内モンゴル自治区沙漠地域におけるモンゴル族の生活様態とその変化(第3報)—, 奈良女子大学家政学研究, Vol. 56 No. 2, pp. 58-64, 2010 (査読有)

⑤馬場まみ：中国内モンゴル自治区における調査研究—モンゴル族の生活様態について—(研究紹介), 日本衣服学会誌, 第53巻, 第1号, pp. 46-47, 2009 (査読無)

⑥姫茹・中山徹・室崎生子・敖敦格日勒・今井範子・野村理恵・咏梅：中国内モンゴル自治区における「逆留守子ども」の生活実態に関する研究—シリングル盟の東ウジウムチン旗を事例として—, 子ども環境学研究, Vol. 4 No. 3, pp. 48-55, 2008 (査読有)

⑦姫茹・中山徹・室崎生子：子どもの戸外遊び実態及び子どもと親からの遊びに対する評価意識—中国・内モンゴル呼和浩特市の2小学校を事例として—, 日本家政学会誌, Vol. 59 No. 10, pp. 837-846, 2008 (査読有)

⑧長坂大：ザグと沙漠の住まい—中国・内モンゴル自治区, 新建築 住宅特集, 2007年12月号, pp. 98-99, 2007 (査読無)

⑨野村理恵・中山徹・今井範子・室崎生子・姫茹・咏梅：定住生活における移動住居ゲルの利用実態と用途変化—中国・内モンゴル自治区シリングル盟の牧畜民を事例として—, 日本建築学会計画系論文集, 第73巻 第630号, pp. 1735-1742, 2007 (査読有)

⑩野村理恵・今井範子・黒崎未侑・高村仁知・中山徹・長坂大・増井正哉・宮坂靖子・武藤康弘・室崎生子・姫茹・咏梅・敖敦格日勒・上野勝代・瀬渡章子・田中麻里：シリングル盟の移民村における牧畜民の生活様態—中国・内モンゴル自治区草原地域におけるモンゴル族の生活様態とその変化(第1報)—, 奈良女子大学家政学研究, Vol. 54 No. 1,

pp. 35-45, 2007 (査読有)

⑪黒崎未侑・今井範子・高村仁知・中山徹・長坂大・野村理恵・増井正哉・宮坂靖子・武藤康弘・室崎生子・姫茹・咏梅・敖敦格日勒・上野勝代・瀬渡章子・田中麻里：シリングル盟における固定家屋に住む牧畜民の生活様態—中国・内モンゴル自治区草原地域におけるモンゴル族の生活様態とその変化(第2報)—, 奈良女子大学家政学研究, Vol. 54 No. 1, pp. 46-53, 2007 (査読有)

⑫姫茹・今井範子・黒崎未侑・高村仁知・中山徹・長坂大・野村理恵・増井正哉・宮坂靖子・武藤康弘・室崎生子・咏梅・敖敦格日勒・上野勝代・瀬渡章子・田中麻里：シリングル盟の都市部と都市近郊におけるモンゴル族の生活様態—中国・内モンゴル自治区草原地域におけるモンゴル族の生活様態とその変化(第3報)—, 奈良女子大学家政学研究, Vol. 54 No. 1, pp. 54-61, 2007 (査読有)

[学会発表] (計22件)

①Yongmei・Toru Nakayama・Noriko Imai・Rie Nomura・Yaru：The changing role on the life of Alashan herders in Inner Mongolia under “environmental immigration” policy, The 15th Biennial International Congress of Asian Regional Association for Home Economics, Pune India, 2009. 12. 11-15

②Yongmei・Toru Nakayama・Noriko Imai・Rie Nomura・Yaru：The changing role on the life of Alashan Mongolian people in Inner Mongolia, Directory of poster session, The 16th Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Science, Kunming, China, 2009. 7. 23-31

③Yaru・Toru Nakayama・Noriko Imai・Rie Nomura・Yongmei：A study of the change in life in children of Mongolian race over 3 generations—Case study of Inner Mongolia Autonomous Region, China, Directory of poster session, The 16th Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Science, Kunming, China, 2009. 7. 23-31

④Yasuhiro Muto：The revival and reorganization of the Obo rituals in Inner Mongolia, Directory of poster session, The 16th Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Science, Kunming, China, 2009. 7. 23-31

⑤咏梅・中山徹・野村理恵・姫茹：禁牧政策

による生活様態の変化による影響 -中国内モンゴルアラシャン盟を事例として-, 2008年度日本建築学会大会(中国)学術講演会, 広島県・広島大学, 2008年9月18~20日

⑥Rie Nomura・Toru Nakayama・Noriko Imai・Yaru・Yongmei: The change of the life styles by domiciliation in Inner Mongolia, China, The 21th World Congress of International Federation for Home Economics, Luzern, Switzerland, 2008. 7. 26-31

⑦姫茹・中山徹・室崎生子・今井範子・野村理恵・咏梅: 中国・内モンゴルにおける三世代の子ども頃の遊びと生活の変化, 日本家政学会第60回大会, 東京都・日本女子大学, 2008年5月30日~6月1日

⑧野村理恵・中山徹・今井範子・姫茹・咏梅: モンゴル民族の定住生活における居住空間と生活変化(第2報), 日本家政学会第60回大会, 東京都・日本女子大学, 2008年5月30日~6月1日

⑨咏梅・中山徹・今井範子・野村理恵・姫茹: 中国・内モンゴル自治区・アラシャン盟における禁牧政策による現状及び今後の課題について, 日本家政学会第60回大会, 東京都・日本女子大学, 2008年5月30日~6月1日

⑩黒崎未侑・今井範子・中山徹・長坂大・野村理恵・増井正哉・室崎生子・姫茹・咏梅・上野勝代・瀬渡章子・田中麻里: 中国・内モンゴル自治区草原地域におけるモンゴル民族の生活様態と居住空間の変化 シリントール盟の移民村・都市近郊における遊牧民の事例調査から, 2007年度日本建築学会大会(九州)学術講演会, 福岡県・福岡大学, 2007年8月29~31日

⑪野村理恵・中山徹・室崎生子・姫茹・咏梅: 中国内モンゴル自治区シリントール盟におけるゲルの役割変化, 2007年度日本建築学会大会(九州)学術講演会, 福岡県・福岡大学, 2007年8月29~31日

⑫姫茹・中山徹・室崎生子・野村理恵・咏梅: 中国・内モンゴルにおける子どもの生活様態に関する考察—シリントール盟の東ウジュムチン旗を事例として—, 2007年度日本建築学会大会(九州)学術講演会, 福岡県・福岡大学, 2007年8月29~31日

⑬咏梅・中山徹・野村理恵・姫茹: 中国内蒙古阿拉善盟禁牧政策による生活様態の変化—アラシャン盟右旗タムソムS家を事例として—, 2007年度日本建築学会大会(九州)

学術講演会, 福岡県・福岡大学, 2007年8月29~31日

⑭Miyuki Kurozaki・Noriko Imai・Hitoshi Takamura・Toru Nakayama・Dai Nagasaka・Rie Nomura・Masaya Masui・Yasuko Miyasaka・Yasuhiro Muto・Ikuko Murosaki・Yaru・Yongmei・Odongerel・Katsuyo Ueno・Akiko Seto and Mari Tanaka: The change in the life style of Mongolians at Inner Mongolia Autonomous Region in China -From the survey of the meadow land of Xilinhote City-, The 14th Biennial International Congress of Asian Regional Association for Home Economics, Kuala Lumpur, Malaysia, 2007. 8. 6-10

⑮Rie Nomura・Toru Nakayama・Noriko Imai・Ikuko Murosaki・Yasuhiro Muto・Yaru・Yongmei and Odongerel: The changing role in "The Mongolian Yurt" and the factor in domiciliation life -Case study on Xilinguole League in Inner Mongolia-, The 14th Biennial International Congress of Asian Regional Association for Home Economics, Kuala Lumpur, Malaysia, 2007. 8. 6-10

⑯Yaru・Toru Nakayama・Ikuko Murosaki・Noriko Imai・Odongerel・Rie Nomura and Yongmei: The children's actual life conditions and problems in the prairie area in Inner Mongolia, China, The 14th Biennial International Congress of Asian Regional Association for Home Economics, Kuala Lumpur, Malaysia, 2007. 8. 6-10

⑰Yongmei・Toru Nakayama・Noriko Imai・Rie Nomura・Yaru: The changing role on the life of Alashan Mongolian people in Inner Mongolia, The 14th Biennial International Congress of Asian Regional Association for Home Economics, Kuala Lumpur, Malaysia, 2007. 8. 6-10

⑱野村理恵・中山徹: 中国内モンゴル自治区草原地域における正月行事と居住空間, 平成19年度日本建築学会近畿支部研究発表会, 大阪府・大阪工業技術専門学校, 2007年6月17日

⑲野村理恵: 定住生活における移動住居ゲルの役割変化—中国内モンゴル自治区シリントール盟を事例として, 日本沙漠学会第18回学術大会, 京都府・総合地球環境学研究所, 2007年5月19~20日

⑳野村理恵・中山徹・今井範子・姫茹・咏梅:

モンゴル民族の定住生活における居住空間と生活変化—中国内モンゴル自治区シリングル盟を事例として—, 日本家政学会第 59 回大会, 岐阜県・長良川国際会議場, 2007 年 5 月 11~13 日

21. 姫茹・中山徹・室崎生子・今井範子・野村理恵・咏梅: 中国・内モンゴル草原地域における子どもの生活実態, 日本家政学会第 59 回大会, 岐阜県・長良川国際会議場, 2007 年 5 月 11~13 日

22. 咏梅・中山徹・今井範子・野村理恵・姫茹: 中国内モンゴルアラシャン盟の近年における禁牧政策および生活変化, 日本家政学会第 59 回大会, 岐阜県・長良川国際会議場, 2007 年 5 月 11~13 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今井 範子 (IMAI Noriko)
奈良女子大学・生活環境学部・教授
研究者番号: 30031719

(2) 研究分担者

瀬渡 章子 (SETO Akiko)
奈良女子大学・生活環境学部・教授
研究者番号: 60179348
(H21: 連携研究者)

中山 徹 (NAKAYAMA Toru)
奈良女子大学・大学院人間文化研究科・准教授
研究者番号: 60222171

増井 正哉 (MASUI Masaya)
奈良女子大学・生活環境学部・教授
研究者番号: 40190350

高村 仁知 (TAKAMURA Hitoshi)
奈良女子大学・生活環境学部・准教授
研究者番号: 70202158

武藤 康弘 (MUTO Yasuhiro)
奈良女子大学・文学部・准教授
研究者番号: 80200244

上野 勝代 (UENO Katsuyo)
神戸女子大学・家政学部・教授
研究者番号: 90046508
(H20→H21: 連携研究者)

長坂 大 (NAGASAKA Dai)
京都工芸繊維大学・大学院工芸科学研究科・教授
研究者番号: 40217980
(H20→H21: 連携研究者)

田中 麻里 (TANAKA Mari)
群馬大学・教育学部・准教授
研究者番号: 10302449
(H20→H21: 連携研究者)

室崎 生子 (MUROSAKI Ikuko)
子どもの住まい・まちづくり研究室・主宰
研究者番号: 90089128
(H20→H21: 研究協力者)

山本 直彦 (YAMAMOTO Naohiko)
奈良女子大学・生活環境学部・准教授
研究者番号: 50368007 (H20 より)

牧野 唯 (MAKINO Yui)
奈良女子大学・大学院人間文化研究科・助教
研究者番号: 20321325 (H20 より)

宮坂 靖子 (MIYASAKA Yasuko)
奈良大学・社会学部・教授
研究者番号: 30252828 (H18 のみ)

村田 仁代 (MURATA Masayo)
(H17 急逝)
申請時・大阪樟蔭女子大学・学芸部・教授
研究者番号: 90219931

(3) 連携研究者

馬場 まみ (BAMBA Mami)
京都華頂短期大学・生活学科・教授
研究者番号: 80218677 (H20 より)

李 璟媛 (Lee kyoung won)
岡山大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号: 90263425 (H20 より)

(4) 研究協力者

白音門徳 (Bayarmund)
中国・内蒙古大学蒙古学学院・教授

敖敦格日勒 (Odongere1)
中国・内蒙古婦女幹部学校・副教授

姫茹 (Yaru)
奈良女子大学・大学院人間文化研究科・特任助教

野村 理恵 (NOMURA Rie)
奈良女子大学・大学院人間文化研究科・
博士後期課程

咏梅 (Yongmei)
奈良女子大学・大学院人間文化研究科・
博士後期課程